２０２２年６月１９日（聖霊降臨後第２主日、特定７、C年）

牧師メッセージ

「行動と祈りの繰り返しによって（または、祈りながら行動する中で）」

（ルカによる福音書9:18-24）

司祭ヨセフ太田信三

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」と、主イエスは言われます。「日々、自分の十字架を背負う」とは、日々主イエスにならって生きることに他なりません。それは主イエスが命じられた通り、神を愛し、人を愛して生きることです。その歩みにおいてこそ、わたしたちは真の救い主と出会い、真の救いの命に与ります。

けれども、日々主イエスに従って歩もうと決意したとしても、実際はとても難しいことです。主イエスですら、神のみ心に従って歩むことは簡単どころか苦しいことでした。主イエスはご受難の前、オリーブ山で「この杯を取り除いて欲しい」と祈り、「わたしの願いではなく、御心のままに」と自分の思いを神さまの思いへと委ねました。そしてこの時、「いよいよ切に祈られた主イエスの額からは、汗が血の滴るように地面に落ちた」とあるように、主イエスですら、恐れの中で汗が血のように滴るほど祈ったのです。祈ることなくして、神のみ心に従って歩むことはできなかったのです。まして、わたしたちが祈ることなくして主イエスにならって生きることなどできようもありません。日々祈り、自分自身の思いを、主への思いへと変えていただかなければ、日々主イエスに従う歩みは続けられません。

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」という主イエスからの問いかけに、ペトロは「神からのメシア」だと答えました。しかし、ペトロが真に主イエスのことが分かったのはずっと後のこと、聖霊降臨によってです。ペトロや弟子たちは、聖霊降臨のそのとき、約束の聖霊を待ってひたすら願い祈っていたのです。そして必死に祈るペトロや弟子たちに聖霊は吹き荒れました。弟子たちは聖霊によって自分の後悔や弱さを吹き飛ばされ、罪の赦しに与り、新しい命を生きる者へと変えられました。これが、「日々、主イエスに従う」ということなのだと思います。主イエスに従って歩もうという実践する。しかし、弟子たちが裏切ったように、それができない自分の弱さを知らされ、躓き、後悔する。その中で、どうか赦してください、新しくしてくださいと必死で祈る。そして、聖霊を注がれ、赦しに与る。そうして心の底からこう感じるのです。「真に、主イエスは今わたしの共におられ、赦してくださっている。導き続けてくださっている。」

わたしたちが日々、主にならって生きようとする中で祈るとき、主イエスとの真の出会いがあるのです。